十九世紀ナロードニキ覚え書き（一）

杉　山　秀　子

(1)　ナロードニキ女性革命家と明治文学

1861年のロシアにおける農奴解放はロシア人に新しい価値観の展開をもたらした。1873年から74年にかけては，ロシアのインテリ青年の間では，農民共同体に基礎をおく社会主義を理想とする「ヴ・ナロート」（в народ）“人民の中へ”の運動が華々しく拡がった。「ヴ・ナロート」運動は，当時の革命的知識人であった，ドヴロリューボフ，チェルヌイシェフスキイ，ピーサレフ，ネクラーソフ等の思想的影響の下にまたたく間にロシア全土にひろまっていったのである。当時の多くの若いインテリたちが，圧倒的多数の農民が，専制の圧政の下に無権利な状態におとしめられている事実を眼のあたりにツアーリ打倒の必要性を痛感させられたのであった。1876年の秋頃には，ナロードニキ綱領が作製された。ローザ・フイグネルの回想によれば，このナロードニキ綱領の基礎にすえられた思想は次のようなものであった。すなわち，ロシア人民は，一定の歴史的発展段階にある他のあらゆる人民と同様に，自己の独自の世界観をもっており，それは，彼らが生活している諸条件のもとで培われ得る知的・道徳的理解力の水準に照応するものだという思想であった。

この土地の上で人民は自分たちの古来の習慣に従って，つまり農村共同体によって生活しており，彼らは千年このかた一度もこの農村共同体を手離したことはなかったし，いまも伝統的な敬意をこめてそれを保持している。農村共同体のためにあらゆる土地を没収すること――これこそは社会主義学説の基本的要求と完全に合致する人民の理想としたのであった。とりわけこの「ヴ・ナロート」運動に参加した女性ナロードニキ革命家たちの数はおびたゞしいもので

あり，ナロードニキの五人に一人は女性であり，彼女たちのストイックな運動への献身ぶりは実に超人的なものでさえあった。当時の革命的知識人たちの思想展開は彼女たちの人生観にも大きな影響を与え，彼女たちを精神的，経済的自立へと駈りたてたのであった。たとえば当時の代表的革命的知識人のチェルヌイシェフスキイはロシアでは先駆的女性解放論者であり，1862年に執筆した『何をなすべきか』（小説）は一大センセーションをまき起した。この小説は封建的家庭から脱出するために名目的結婚という手段をえらんだ娘ヴェーラ・パヴロヴナが医学生ロプホープとの平等原理にうらうちされた家庭生活を通じて次第に経済的自立をかちとるようになり，フーリェ的原理を体現させたアルテリ式裁縫店を経営するまでになるが，新しい恋をし，夫のロプホープは身を隠し，ストイックな革命家ラフメートフに出会うことによって新たに結婚をし医学の道に入るという一種の恋愛小説である。チェルヌイシェフスキイは精神的にも経済的にも自己を自立させ，確立させていったヴェーラを描くことによって，妻の肉体も心も完全に自由であり，その恋愛を神格化したことは当時の読者に甚大な影響を及ぼしたのであった。B. A. ムイスリャコフによれば，この小説は，ツルゲーネの『父と子』（1862年）に対抗して作られたとしているが，バザーロフのオジンツォーヴァをみる眼は тело（肉体）に対するものであり，そこにはニヒリスト，バザーロフの科学優先主義と女性蔑視という二重性がよみとられるのである。しかし，このことをもってツルゲーネフの『父と子』の価値が下げられるべきではなく，又，単純にツルゲーネフを女性蔑視者ときめつけるのも早計であろう。同じツルゲーネフの1858年作の『Ася』を読みかえせばわかるが，いまだ市民社会が未成熟な社会において，女主人公の『Ася』が如何に一途に生きた積極的主人公として描かれていることか，十九世紀としては異例な小説であろう。

チェルヌイシェフスキイの『何をなすべきか』が読まれると，モスクワやペテルブルグでは経済的女性の自立を求めてアルテリ式裁縫店があちこちで経営されるようになり，60年代には男女平等の教育の機会均等が望まれるようになった。

60年代の女性解放思想の波は多くの傑出したナロードニキ女性解放家たちを生んだ。

たとえば貴族出身のヴェーラ・ザスーリチ，ベロフスカヤ，フィグネル，スピリドーノヴァ等が続々と輩出し，なかには革命的活動のために名目結婚（当時は名目的に結婚することにより親権から解放されることを望み，多くの女性がスイスやドイツの大学で学ぶために出国した。）をしたりする女性もいた。彼女たちは年頃の娘が好んで身を飾るようなことは一切せず，ひたすら学問に励み，革命運動に献身した。『ロシアでの赤き六ケ月』（1918年ニューヨーク）を刊行したルイーズ・ブライアントは，その著書の中で，スピリドーノヴァの人となりを次のように回想している。「マリア・スピリードノヴァは，まるでニュー・イングランド出身のようであった。上品な小さい白い襟のついた質素な黒い服や，彼女の囲りに漂う洗練された上品さ，厳格さの雰囲気は，気違いじみた騒乱のロシアというよりも，そんな地方に属するように思える。彼女は非常に若い——三十歳を越えたばかりである。またことのほか，ひ弱そうにみえるが，いわゆる『繊細な』人間特有の針金のような挫けることのない強さと大きな回復力を持っている。」 しかしこの外見的印象とはうらはらに，19才のときには，タムボーフの総督ルジェノーフスキイを暗殺している。ルジェノーフスキイは税金の払えない農民たちを拷問にかける凶悪な履歴をもった人間として当時知られていた。ある時，鉄道の駅に居合わせたスピリドーノヴァは，最初の一発を彼の頭上に発射させ，二発目はまっすぐ心臓をめがけてねらいうちしたといわれる。彼女は「明晰な頭脳と同様に確かな腕をもっていた」のであった。とりまきのカザーフたちは，彼女をむちで打ち，「まる裸にして冷えきった独房に投げこんだ。後でもどってきた彼らは，彼女に同志や共犯者の名前を話すように命じた。スピリドーノヴァは頑として口を割らなかった。そのため彼女の長く美しい束髪は引きぬかれ，体中をたばこで焼かれたのである。ふた晩彼女は憲兵やカザークにとり囲まれてすごした。しかし結局のところ，スピリドーノヴァは激しい病いに倒れてしまった。彼らはスピリドーノヴァに死刑を宣告したが，彼女はそれについて何一つわからなかった。また

宣告が終身禁固に変えられたときも，それは同様であった。彼女は半分意識不明の状態でシベリアへ流刑に処せられた。」

これと相前後するがザスーリッチが1878年，特別市長官トレポフを撃ったのは余りにも有名な事件であった。この事件のあと，権力者を狙撃するテロ行為が相つぎ，テロ結社「土地と自由」はプレハーノフ派の「土地統割替」とツアーリ専制を打倒を標傍する「人民の意志」派との二つに分裂し，ベロフスカヤもフィグネルも「人民の意志」派に参加し，ベロフスカヤは1881年３月のツアーリ暗殺の首謀者として処刑された。

このようなあいつぐテロ行為の数々は世界を呆然とさせ，明治十年代の日本の自由民権運動に露国虚無党の名で大きなイムパクトを与える結果となった。時折しも，明治14年には板垣退助が自由党を組織し，一方，15年には大隅重信が立憲改進党を組織して，両党が自由民権の立場に立脚して政治活動を始めていた。これに対抗して福地源一郎ひきいる立憲帝政党が設立され，三者，三どもえになってそれぞれが活動を開始しはじめたのである。とりわけ自由党側の青年党員が虚無党の活動に多いに注意を向け，政論小説として活動のプロパガンダに利用しようとする動きがあった。それらの政治プロパガンダの傾向は一様に虚無党の恐ろしさを強調しながらも彼らのやむにやまれぬ活動に一種の英雄性さえみい出しその行為に触発され，模倣する青年さえ現われるようになった。しかし結果的には自由党勢力の低下をもたらすにすぎなかったようである。

これらの背景をふまえた当時空前の政論小説の花ざかりを日本の文壇は一時的に迎える。たとえばポール・ヴェルニェ（フランス）の『虚無党退治奇談』（川島忠之助訳）などもその一環として日本に翻訳紹介されたのであった。

内容は虚無党に狙われている父をもつボリス・ニキーチンとフランス人のアルベルが力をあわせて虚無党とたたかい，ツアーリ暗殺の謀略をみやぶるという筋立てでこれに美女アンナとの悲恋をからませて面白おかしくことのてん末を物語にしているもので今からよみかえせば陳腐なものであったが訳者川島忠之助の翻訳の意図は，ロシヤの虚無党の恐しさを一般に知らしむるというものであったことがこの翻訳者の緒言に記されているので以下引用しておく。

十九世紀ナロードニキ覚え書き（一）

（明治初期翻訳文学選第Ⅱ期雄松堂書店発行より）

近來新誌ニ就テ虚無黨ナル怕ルベク憎ムベキ政黨ヲ生シ上下乖離シ國勢日々ニ迫ルト聞クヲ以テ親ク君ニ就テ其情ヲ叩ク君曰吾子ノ問フ所一朝一夕ノ談話ノ能ク尽スベキ所ニ非ズ予一本ヲ贈ラン子宜ク此ニ依テ該黨實況ノ一班ヲ知レト他日果シテ一本ヲ恵贈セラル題シテ虚無黨退治ト稱ス佛國稗史家ポール・ヴェルニエ氏ノ著述ニ關ル予欣然トシテ之繙クニ所謂政論稗史ノ躰ニシテ專ラ先帝被害前ノ事ヲ記スト雖今日ニ至ヲ毫モ該黨ノ凶暴ニ至テハ變ズル所無シ書中曲ニ該黨ノ歸國ニ發セシ原由ヨリ蔓延今日ノ熾ヲ極ルニ迄ルノ事情政府ノ之ニ封スル政略ノ現況及ビ之ヲ蕩掃シ亂ヲ轉シテ治トナスノ策略ニ至ル迄綱羅遺ス所ナシ

また女性の虚無党員の物語を扱ったものとしては明治14年曙新聞に載ったヴェラ・ザスーリッチ事件の記事をもとに『魯国奇聞烈女之疑獄』が出版された。宮崎無柳はこの事件をもとに『魯国虚無党寃柱(むじつ)及鞭苦(しもと)』を出版し，その中でザスーリッチのトレポフ狙撃事件に触れ，これが1881年の皇帝アレクサンドル二世暗殺のひき金になったことを述べている。また明治17年には『虚無党実伝記・鬼啾啾』が翻訳され，ここでも同じくザスーリッチの狙撃事件と，ベロフスカヤのツアーリ暗殺事件についての行為について触れられている。このように明治期，ナロードニキの女性革命家に対しては烈女のレッテルが貼られ，このイメージの同一線上に，コロンタイなとが昭和期に入って位置づけられ，赤国の恐しい女党員というイメージがいやがうえにも増巾されたことは想像に難くない。

その他虚無党に関する翻訳は日本では明治期に多数おこなわれており，柳田泉の『明治初期翻訳文学の研究』の中に詳しいリスト・アップが掲載されているので書き留めておく。

明治14年「魯国の烈女ヴェラ・サシュリッチ糺問の記」（曙新聞）

同　　年「西国烈女伝」（田島象二編）（第三章は上記ヴェラの糺問記である）

同　　年「魯帝殺逆記」（大久保常吉）（アレクサンドル二世暗殺の記事）

同　15年「魯国奇聞烈女之疑獄）（杣田策太郎）（14年曙新聞の記事単行）

同　　年「冤柱乃鞭笞」(宮崎夢柳訳)(上記のヴェラ伝を更に小説化せるもの)

同　　年「虚無党退治奇談」(川島忠之助訳)(Paul Vernier: The Chase of the Nihilists)

同　　年「露国虚無党事情」(西河通徹訳)

同　16年「クロプキン侯伝」(朝野新聞)(Stepniak: Underground Russia の一部)

同　　年「一滴千金憂世乃涕涙」(宮崎夢柳訳)(Edward King: The Gentle Savage) 自由新聞

同　17年「魯国虚無党秘録」(自由新聞)(右 Underground Russia)

同　　年「露国安那物語」(坂崎紫瀾訳」(「虚無党退治奇談」を更に稗史化せるもの) 土陽新聞

同　　年「虚無党実伝記鬼啾啾」(宮崎夢柳訳)(Stepnaik: Underground Russia を主とせるもの) 自由新聞

同　19年「通俗虚無党形気」(冷々亭杏雨訳)(Tourgenieff: Fathers and Children) 未刊，杏雨とは二葉亭の前号

同　21年「政治上放逐人千里風煙」(鈴木天眼訳)(Tissot, Amero: Adventures of the three Fugitives)

同　22年「美人の手」(黒岩涙香訳)(Boisgobey: The Cold Hand)

参考・引用文献

○ Чернышевский Н. Г. Литературное наследие, TT, 1-11 1927-1930

○ Чернышевский Н. Г. Полное собрание сочинений, TT, I-XVI M. 1939-1953

○ Мысляков В. А. "Отцы и дети" в восприятии Чернышевского, 〈Русская литература〉 № 2 (1978)

○ И. С. Тургенев Полное собрание сочинений, Том 7.

『遙かなる革命　ロシア・ナロードニキの回想』ヴェーラ・フィグネル著　田坂昂沢　批評社

『戦闘団の人々』マリア・スピリドーノヴァ著　出かず子訳　鹿砦社

『ロシア・ソ連　西洋史(6)』倉橋俊一編　有斐閣

『明治初期翻訳文学の研究』柳田泉著　春秋社

『明治初期文学選　第Ⅱ期　虚無党退話奇談』雄松堂